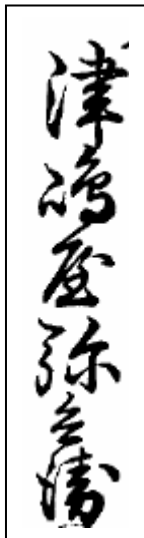


よく出てくる崩し方に慣れる

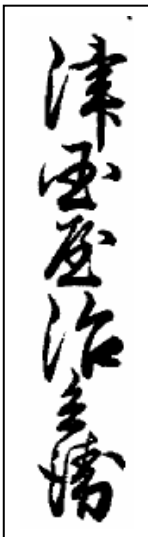
右の古文書は、「津 屋弥 」（ は読めない）という感じでしょうか。



は「嶋」です。鳥の部分部分が「鳥」の崩しです。また、兵は「兵」、衛は「衛」という字です。特に説明の方法もなく、そういうものだとしか言いようがない字です。このような字は、多くの古文書を読んでいくうちに慣れてくるものです。実は、書翰しょくわんなどを除き、江戸時代の古文書はだいたいこのパターンが

決まっています、使う文字ごい(語彙)はそれほど多くないのです。

次に左の古文書はどうでしょうか。前回の知識と上の知識を結びつけると、



治以外の文字は読めるはずですが...。といわれても読めないものです。何回も“あっそうだった”というのを繰り返すことで、だんだん読めるようになっていきます。そしていつの間にか、これまでなぜ読めなかったのか、わからなくなっていくものです。くずし字辞典なども使っていると思いますが、わからない字があったときに、その周辺の字も何となく見ておくと上達も早いと思います。さて、残った治を、“どのように書かれているかを観察する”

と治という感じです。偏は「^い」か「^い」、旁は「谷」「台」「名」くらいが

候補となりそうです。人の名前であるということ踏まえて、偏と旁を組み合わせていくと、「治」？と推測できるかもしれません。したがって、これは「津国屋治兵衛」。

最後は、半ば力試しです。最初は「南」。次の組は前回出てきました。魚はやや難しい。上半分の魚が魚という感じなので、魚だとわかれば、魚が上に来る漢字は「魚」くらいしかない、となります。そう

いえば「点」という漢字を卓と書く人もいますね。おはとてもよく出てくる字で「相」です。次回からは文章も読みますが、「相触(あひふれ)候」とか「相分あひわかり候」とかいうふうに出ます。ここで覚え

てください。最後の組はもう何回も出てきました。模が問題ですが、

木は「木」か「木」で模は下に「大」という字があり、上の三は「++」

のようですから「模」？と予想できるかもしれません。まとめると「南組魚屋町 相模屋まがみ」となります。

